茨城大学教育実践研究 42(2023),192-197

幼稚園教諭の性に関する指導についての認識

青 柳 直 子*・鈴 木 美 優**・松 岡 宜 子***・神 永 直 美*, ***

(2023 年 10 月 23 日受理)

Survey of Sex Education by Preschool Teachers

Naoko AOYAGI, Miyu SUZUKI, Noriko MATSUOKA and Naomi KAMINAGA

キーワード：生命（いのち）の安全教育，幼稚園教諭，幼児期

【目的】令和 3 年度より文科省は子どもたちが性暴力の加害者、被害者、傍観者にならないよう、全国の学校園において「生命（いのち）の安全教育」を展開している。幼児期は性に関する知識理解や認識が不十分であるため、性暴力の対象となることも多いことから、生命を大切にする考え方や、自分や相手、一人一人を尊重する態度などを発達段階に応じて身に付けることは早急に取り組むべき課題である。そこで、本研究では幼稚園教諭の性に関する指導についての現状や認識についての調査を行い、性に関する指導の推進を図るための基礎資料を得ることを目的とした。【方法】令和 5 年 3 月に関東地区・A 大学教育学部附属幼稚園の教諭を対象として、性に関する指導の現状や認識について自記式質問紙調査を行った。【結果】性に関する指導の必要性については、全員が認識していた。個別指導・集団指導を行ったことがある教諭は約 5 割であり、多くの者が両指導において参考にする資料が少ないことに困難感をもっていた。【まとめ】本調査により明らかとなった現状と課題をふまえ、性に関する指導の推進を図るため、指導方法・教材の開発や保護者への啓発資料作成などを行い、効果的な指導実践モデルを構築することが今後の課題である。

はじめに

文部科学省は、令和 3 年度より全国の学校園において「生命（いのち）の安全教育」を展開している [1)]。この取組みは幼児期より生命の尊さを学び、性暴力の根底にある誤った認識や行動、また、性暴力が及ぼす影響などを正しく理解した上で、生命を大切にする考え方や、自分や相手、一人一人を尊重する態度を発達段階に応じて身に付けることを目指すものである。

近年、SNS の普及により、チャットなどを通じて見知らぬ人を含めたやり取りが容易になっている。令和 4 年度における児童ポルノ事犯の検挙件数は 3,035 件、検挙人員は 2,053 人、被害児童数は 1,487 人であり、いずれも増加傾向である [2)]。 SNS に起因する事犯の被害児童数は 1,732 人であり、

*茨城大学教育学部　**茨城大学大学院教育学研究科　***茨城大学教育学部附属幼稚園

高い水準で推移していることから、今後のさらなる増加が懸念される[3]。

幼児期は性に関する知識理解や認識が不十分であるため、性暴力の対象となることも多いことから、生命を大切にする考えや、自分や相手、一人一人を尊重する態度などを発達段階に応じて身に付けることは早急に取り組むべき課題である。さらに、幼児期は道徳性や社会性の基盤が育まれていく時期であり、人間形成に大きく影響していく時期でもある。そのため、心身の健やかな発育発達のためには、幼児期からの性に関する指導は必須と言える。

一方、幼児期の性教育は必要だと考える幼稚園教諭は約3割であり、保護者に比べると幼児期の性教育の必要性の認識が低いとの指摘がみられる[4]。同報告によると、性教育について困っていることがある者は約3割であり、困っている理由として「教え方がわからない」が最も多く、次いで「学習機会がない」「知識不足」が挙げられていた。

発達段階をふまえた性に関する指導の必要性という観点から、幼児期から学齢期にかけて切れ目のない指導体制の構築は必須である。そこで本研究では、指導開始初期である幼稚園における教諭の性に関する指導についての認識と実施状況に係る現状把握を行い、切れ目のない「生命（いのち）の安全教育」に関する指導体制の構築・推進を図るための基礎資料を得ることを目的とした。

研究方法

1. 調査対象・方法

令和3年度より「生命の安全教育」に関する取組みを行っている関東地区のA大学教育学部附属幼稚園1園を対象として、令和5年3月に自記式無記名の質問紙調査を行った。対象は幼稚園教諭9名であり、調査票回収率は100%、有効回答数9であった。

調査項目は、「性に関する指導の実施状況（個別指導・集団指導）」「性に関する指導を行う際に参考にしているもの（個別指導・集団指導）」「性に関する指導上の困難感（個別指導・集団指導）」「性に関する指導についての認識」とした。

調査は無記名で行い、回答は強制ではないこと、内容は研究目的以外には一切使用せず、個人が特定されることはないことについて、調査目的と併せて書面にて説明を行った。調査票の提出をもって調査への同意を得たと判断した。得られたデータはパスワード管理されたファイルおよびPCを用い、施錠できる部屋ですべて管理を行った。

結果および考察

1. 性に関する個別指導および集団指導の実施状況

対象者9名のうち、性に関する指導を行ったことがある者は5名（55.6%）であり、その全員が「個別指導」「集団指導」の両方とも実施したことがあった。一方、指導を行ったことがない者（4名）では、「個別指導」「集団指導」のいずれも実施した経験がなかった。

1）指導上の困難感（個別指導・集団指導）

性に関する個別指導を行ったことがある者（5 名）に、「性に関する個別指導を行う際に、困難さを感じる（感じた）ことはあるか」を尋ねたところ、「時々ある」と回答した者は 4 名（80.0%）であった。そのように感じる理由（複数回答）については、「参考にする資料が少ない（少なかった）から」が 3 名（75.0%）、「子供たちの性に関する知識理解の定着に時間を要する（要した）から」「保護者と連携できない（できなかった）から」 がそれぞれ 2 名（50.0%）であった。

性に関する集団指導を行ったことがある者（5 名）に、「性に関する集団指導を行う際に、困難さを感じる（感じた）ことはあるか」を尋ねたところ、「時々ある」が 4 名（80.0%）であった。そのように感じる理由（複数回答）については、「参考にする資料が少ない（少なかった）から」が 3 名（75.0%）、「自身の知識が十分ではない（十分ではなかった）から」が 2 名（50.0%）であった。

指導上の困難感をもつ理由については、参考資料が少ない（少なかった）ことが、個別指導・集団指導に共通して最も多く挙げられていた。校務等の多忙さにより、参考資料の収集や教材準備のための時間確保が課題となっている教育現場の現状については、昨今指摘されているところである。性に関する指導の充実化のため、活用しやすい教材の開発・提供を含めた支援を早急に整備することが求められる。

2）指導を行う際に参考にしているもの（個別指導・集団指導）

個別指導を行う際に参考にしているもの（複数回答）としては、「他の教員の指導実践内容」「研修会（園内研修、教育委員会等主催のもの）」をそれぞれ 3 名（60.0%）が挙げており、次いで「教育委員会等が発行する性に関する指導の手引きやガイドライン」を 2 名（40.0%）が挙げていた。

集団指導を行う際に参考にしているもの（複数回答）については、「他の教員の指導実践内容」を 4 名（80.0%）が挙げており、次いで「研修会（園内研修、教育委員会等主催のもの）」「書籍（絵本を含む）」をそれぞれ 3 名（60.0%）が挙げていた。他教員の実践について互いに学び合うことができるような研修機会の整備・充実が必要である。

性に関する指導で困っていることとして、指導方法がわからないことが最多であり、次いで学習機会がないこと、知識不足が多く挙げられている現状 [5]をふまえると、指導内容や指導方法に関する参考資料および学習する機会の提供などが求められる。

なお、性に関する指導を行う際に、困難さを感じる（感じた）ことが「全くない」と回答した者（1 名）は、個別指導・集団指導の両方において困難さを感じる（感じた）ことがなかった。その理由としては、「参考にする資料がある（あった）から」「指導に関する研修会に参加したことがある（あった）から」「他の教員と連携して取り組むことができる（できた）から」を両指導において挙げていた。参考資料や研修会等への参加により知識を習得することにより、教員間で連携した対応が出来ていたのではないかと推察される。これらの体制整備は、性に関する指導の充実化を図るうえで必須であると考えられる。

2. 性に関する指導についての認識

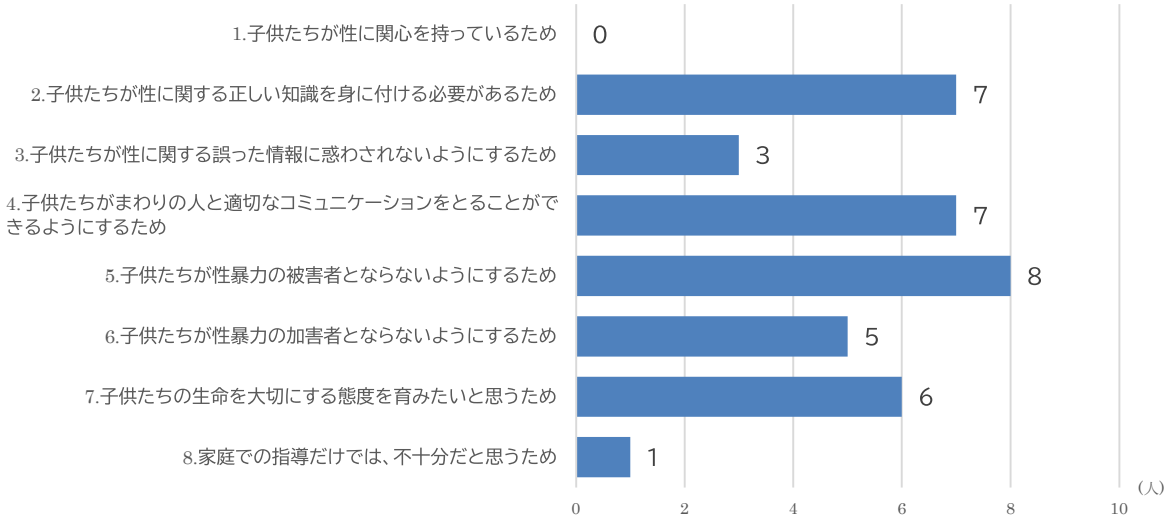
1）幼稚園における性に関する指導の必要性

幼稚園教諭が性に関する指導を行うことは必要であると思うかという点については、「とてもそ

う思う」が 5 名（55.6%）、「どちらかと言えばそう思う」が 4 名（44.4%）であり、対象者全員が必要性について認識していた。

性に関する指導を行う必要があると考える理由（複数回答）としては、「子供たちが性暴力の被害者とならないようにするため」が 8 名（88.9%）で最も多く、次いで多かった内容は「子供たちが性に関する正しい知識を身に付ける必要があるため」「子供たちがまわりの人と適切なコミュニケーションをとることができるようにするため」がそれぞれ 7 名（77.8%）であった（図 1）。

社会性の基盤が育まれ、人格形成期として重要な幼児期において、日常生活の中で子供自身が自分の心と身体を守ること、自分のことも相手のことも大切にしようとする気持ちを育み、友達との関わり方を身に付けることを重要視しながら、教諭が日々保育をしている様子がうかがえる。



（複数回答）

図 1　幼稚園教諭が性に関する指導を行うことが必要であると考える理由

幼児期の性教育は必要だと考える幼稚園教諭は 27.8%である一方で、「分からない」とする者が 44.6%であったことが報告されており [6]、指導者自らが子供たちに教えることについての必要性について判断がつかないといった実状もうかがえる。本対象者は全員が性に関する指導について肯定的な認識を持っていたが、実践については困難感をもつ現状がみられた。自身が性に関する教育を十分に受けてきていないということも背景にあるのではないかと考えられる。

海外に目を向ければ、性に関する教育の国際方針を取り入れた実践が世界各地で積極的に進められている。性の健康と権利に関する教育の必要性から、2010 年に UNESCO（国連教育科学文化機関）が UNAIDS（国連合同エイズ計画）、UNFPA（国連人口基金）、WHO（世界保健機関）、UNICEF（国連児童基金）と協働して、「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」を刊行した [7,8]。その後、世界各地における実践の積み重ねや、インターネット・ソーシャルメディアの影響を始めとする性に関する新たな課題などの出現を受けて、2018 年に改訂版が発行されている [9]。「国際セクシュアリ

ティ教育ガイダンス」では、5 歳から 18 歳の子供を対象としており、ジェンダー平等や性の多様性の視点を含む人権尊重を基盤にしている。性被害の現状[10]をふまえると、日本においても幼児期より性に関する教育を「性の権利」と考える、このようなセクシュアリティ教育の必要性は明らかである。

生命の安全教育の積極的な推進を図るため、幼児期における実践も進みつつある[11]。子供の発達段階をふまえつつ、「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」や実践事例集[12]などを積極的に活用し、研修会などで教諭間で共通理解を深めながら指導実践につなげていくことが求められる。

2） 性に関する個別指導・集団指導を行う上で、重要だと思う内容

指導上重要であると考える内容（複数回答）については、対象者全員が「子供たちの実態に即した内容にすること」を挙げていた（図 2）。次いで「指導内容を日常生活と関連させること」「視聴覚的にわかりやすくすること」を 5 名（55.6%）が重要だと考えていた。

指導上の困難点として、子供たちの性に関する知識理解の定着に時間を要すること、保護者との連携不足や知識不足が挙げられていたが、子供たちの発育発達段階や個々の実態をふまえ、日常生活の事象と関連付けながら、わかりやすく指導をしようと工夫している様子が見てとれる。

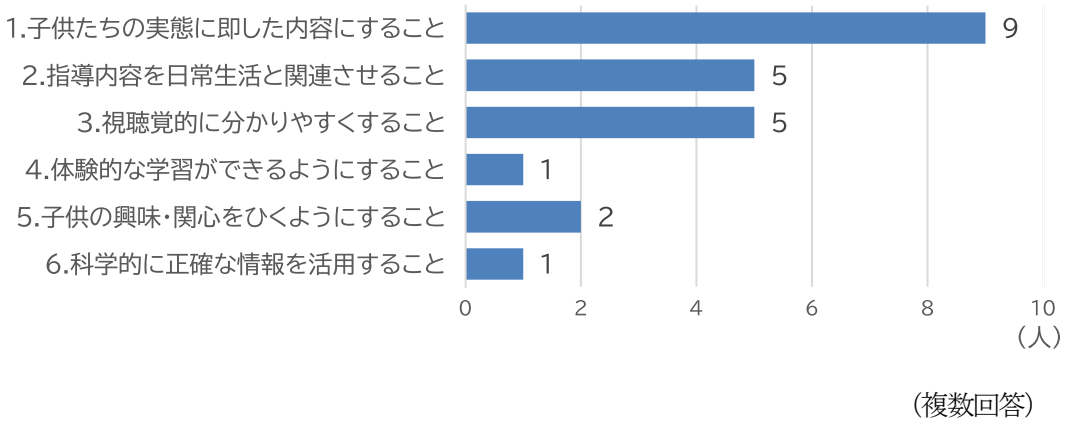


図 2　性に関する個別指導・集団指導を行う上で重要だと思う内容

まとめ

切れ目のない「生命（いのち）の安全教育」に関する指導体制の構築・推進を図るため、本研究では幼児期に焦点を当て、幼稚園教諭の性に関する指導の現状や認識について把握した。本調査により明らかとなった現状や課題をふまえ、性に関する指導の推進を図るため、指導方法・教材の開発や保護者への啓発資料開発などを行い、幼児期から学齢期にかけて切れ目のない効果的な指導実践モデルを構築することが今後の課題である。

謝辞

本研究をすすめるにあたり、調査のご理解とご協力を賜りましたA幼稚園の園長、養護教諭、諸先生方に深く御礼申し上げます。

本研究は、令和4年度茨城大学教育学部附属連携研究費補助金【幼児期における「生命（いのち）の安全教育」の実践モデルの構築】による支援を受けて実施されたものです。

注

1) 文部科学省「性犯罪・性暴力対策の強化について　－2. 生命（いのち）の安全教育－　」（https://www.mext.go.jp/a_menu/danjo/anzen/index.html, 2023年2月28日閲覧）
2) 警察庁生活安全局「令和4年における少年非行及び子供の性被害の状況」（https://www.npa.go.jp/bureau/safetylife/syonen/pdf-r4-syonenhikoujyokyo.pdf, 2023 年 7 月 31 日閲覧）
3) 同書, 17.
4) 遠藤恵子, 井上京子, 坪井禮子, 石沢セイ子, 松田水月, 佐藤弘美「幼児に対する性教育の実態」『山形保健医療研究』第10巻, 山形県立保健医療大学, 2007, 1-9.
5) 同書, 5-7.
6) 同書, 5-8.
7) ユネスコ『改訂版　国際セクシャリティ教育ガイダンス　-科学的根拠に基づいたアプローチ-』（明石書店, 2020）　1-288.
8) 浅井春夫『包括的性教育　－人権、性の多様性、ジェンダー平等を柱に―　』（大月書店, 2020）1-190.
9) ユネスコ, 前掲書, 1-288.
10) 警察庁生活安全局, 前掲書, 5-8.
11) 青山有希, 小湊真衣, 奥村寿之, 奥村佳代子, 桂川泰典, 菅野純「学校等における生命（いのち）の安全教育における実践報告」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第 58 巻, 2023, 163-183.
12) 文部科学省「令和4年度「生命（いのち）の安全教育」の取組に関する実践事例集」（https://www.mext.go.jp/content/20230704-mxt_kyousei01-000014005_02.pdf, 2023 年 7 月 31 日閲覧）